ビスを提供するために、継続的に医業ならびに臨床検査を中心とした最新の情報を取得し、最新の知識を修得していくことが求められます。

これらを実現するためにこの制度は、次のことを取り入れます。

1) 継続学習の義務化と実務経験の義務化による品質の維持

2) 実績に基づく第三者の評価をオープンにすることによる高い社会的信頼

3) 多様な手段で資格の維持が可能な資格更新制度

5）STEP 3 理論・政策の創造

少子高齢化が進展する我が国において、臨床検査業界が持続的な成長を図っていくためには、技術の開拓とその成果を活用したイノベーションの持続的創出が不可欠となります。

臨床検査技術の専門分野が、より細分化される一方で、社会で必要とされる技術は様々な分野の技術が複雑に絡み合っています。その中で、イノベーションを持続的に創出するためには、分野や組織の垣根を越えた「オープン・イノベーション」が非常に重要であり、社会との連動は、この「オープン・イノベーション」を進める有効な手段の 1 つとなります。

イノベーションとは、単なる技術革新にとどまらず、新たな考え方によって社会に大きな創造的変革を起こすことであり、既存の概念を打ち破ろうとするとき、信頼できる科学的根拠を国民に示していくことが大きな推進力となります。

そのためには、一般社会全般にわたる明確な目標設定を行い、その目標から導かれた研究開発計画を着実に遂行する人財の育成が必要となります。

また、国民が安心・安全に医療を受けられる社会の実現を図るためには、経済面における効率性を高める経営戦略・技術戦略・標準化戦略を一体的に推進できる人財の発掘・育成が必要となります。

日臨技は、独創的・先端的基礎研究の推進を図るとともに、国への政策提言、研究成果を社会に還元するため、人財育成等を重点的に支援するとともに、このようなイノベーションの持続的創出を後押しするための“実践の場”の提供に積極的に取り組むことが重要と考えます。

＜図２　日臨技認定総合監理技師制度養成プログラム＞

3．日臨技認定総合監理技師制度について（図 2）

1）制度の概要

名称等は仮称であるが、少なくとも 3 段階の階層構造が必要と考えます。

第 1 階層は初級、第 2 階層は中級でここまでが認定の対象となります。第 3 階層は上級で、認定されるものではなく、資格取得するものと位置づけました。

各認定および資格取得に必要な受験要件は青の長方形枠内に記載されています。認定および資格のための審査要件はピンク色の枠内に記載されています。

2）初級認定監理臨床検査技師｛認定一種｝（仮称）

初級に求められるものを『組織内でリーダーシップを発揮し、検査室運営や病院運営等に参画できる人材』としました。

組織内のマネジメント手法を基礎として習得し、さらに組織の牽引力となるべくリーダーとしての知識や技術を幅広い分野から会得することが重要となります。

そのため単位取得型学習システムを取り入れ、大学等で実施されている一般教養の分野（例えば人文科学、社会科学、自然科学、外国語等）も認定審査要件に組み込むこととしました。

取得すべき単位は必須専門単位と選択教養単位とがあり、取得単位は消滅するものでは無く、日臨技の会員である期間は継続して認められます。認定試験に必要な単位取得が揃った時点で受験資格が得られるものとし、取得までに掛かる年数は各自のペースで生涯学習的に進めることが可能となります。

因みに、日臨技生涯教育修了も必須取得単位となります。このほか必須専門科目は医療に関する倫理、管理学、政策学等が概論や各論として含まれます。

学習の基本は自宅学習と集中講義とし科目担当教官から指定された教材を中心に半年を一期として前後期毎に履修選択することになります。

期が始まる前に科目説明と履修のポイントを示し、期末に集中講義と試験やレポート等により単位取得が可能となる仕組みが予定されています。

3）中級認定監理臨床検査技師｛認定二種｝（仮称）

初級認定監理臨床検査技師｛認定一種｝（仮称）取得者で 1 回以上の認定更新者が対象となり、取得単位の幅を更に増やすことで、より大きく豊かな人間力を身につけることにより、経営組織を牽引できる人材となることを目標とします。

例えば、自施設の経営状況分析や存在地域における医療政策と自施設の関係や問題点、また将来に向けた自施設の方向性や方針の立案と実践等を論文としてまとめることが挙げられます。

4）上級監理臨床検査技師（仮称）

・・・この資格には認定は付きません

上級監理臨床検査技師に求められるものは『真のエリートとして、社会における組織の価値観を明確にし、組織のあるべき姿を描き、組織を導ける人財であり、社会に影響を及ぼすことのできる人財である。』としました。

即ち教わるのではない、自ら学ぶことを創造するのです。

この様な人財には、私たちごときが認定するなど烏滸がましいとさえ言えるでしょう。その人となりを誰もが認め、敬愛の念と引きつける偉大な人間力は他を圧倒する筈です。

ただ、その様な人財が存在したとしても見いだす名伯楽がいなければ、悲劇でありこれ以上の損失はありません。日臨技が将来に向け、今後最も大切なものは逸材となりうる人財の確保であります。

会報 JAMT の論説に掲載されていましたが、千里の馬は千里の馬を見いだす目を持った逸材がそこにいたからであり、その時代にそういう人財が存在しなかったら千里の馬も駄馬と一緒にされてしまったことでしょう。

5）最後に

「認定総合監理技師制度」は今後、職能を基本とする日臨技の卒後教育の大きな柱となるものと考えます。教室や研修会場が無くても自宅学習をベースに『独学の精神』をサポートする環境整備が大切であると考えます。

制度開始に向け準備する中で、この WG 報告を是非とも取り入れ前進されることを切望します。　＜了＞

◇　真のエリートとは・・・

第一に、文学、哲学、歴史、芸術、科学といった何も役にたたないような教養をたっぷり身につけていること。

そうした教養を背景として、庶民とは比較にならないような圧倒的な対局観や総合判断力を持っていること。

第二に、「いざ」となれば国家国民のために喜んで命を捨てる気概があること。

「国家の品格」より